

生活空間研究に対する視座の変遷

— 今和次郎の生活学と建築学会及び家政学会の学会論文に着目して —

Changes in perspectives regarding research on living spaces
– Focusing on the papers of Wajiro Kon's Life Sciences and Architectural Institute of Japan
and the Japan Society of Home Economics –

河 面 涼 代* 薬 袋 奈 美 子**
Sumiyo KAWAMO Namiko MINAI

要 約 本稿では、災害時の生活空間の復興に必要な視点を明らかにするための第一段階として、生活空間研究に対する視座がどのように変化してきたかを明らかにすることを目的とする。本研究では、今和次郎が提唱した生活学と、建築学会及び家政学会の学会論文を資料として用いる。生活の捉え方は、時代を追うごとに、生活を共にする対象者が家族から地域コミュニティに拡大し、また、計画や意匠といったハード面だけではなく、ソフト面も含めた多様な視点から論じられるようになってきている。今和次郎は初めから生活を多角的に捉えていた一方で、生活空間研究は時代を追うにつれて、生活を多角的に捉えようとするようになったことがわかる。生活を捉えることは、非常に多くの視点が必要であり、いまだに生活学の方法や、生活の評価軸が確立されていないのも頷ける。

キーワード：生活学，今和次郎，生活空間，復興，テキストマイニング

Abstract The purpose of this paper was to ascertain how perspectives regarding research on living spaces have changed as the first step to ascertain the perspective needed to reconstruct living spaces following a disaster. The materials used in this study are the life sciences proposed by Wajiro Kon and the papers of the Architectural Institute of Japan and the Home Economics Society. Although Wajiro Kon had a multifaceted view of life from the beginning, research on living spaces began to adopt a multifaceted view of life as time went by. A vast number of perspectives are needed to grasp life, and life science methodologies and axes around which to evaluate life have not yet been established.

Key words : Life sciences, Wajiro Kon, Living spaces, Reconstruction, Text mining

1 はじめに

1. 1 研究背景と目的

東日本大震災後多くの被災集落が、防災集団移転促進事業や、災害公営住宅の整備等による居住地移転をおこなっている。災害時の居住地移転に伴う空

間変容に関する既往研究は、①宅地の再編に着目したものと、②住宅の形状に着目したものの2種類に大別できる。(Table 1)

これらの既往研究から、居住地移転による空間変容は地域コミュニティや日常生活に影響を与えるが、土木的判断が重視される移転計画において、地域コミュニティや従前集落の日常生活を継承するための方策をとることは困難であったことがわかる。

また、災害時の生活空間の復興に関する既往研究は、それぞれ、①集団移転、②住宅再建、③生活再

* 家政学研究科住居学専攻
Dept. of Housing and Architecture
** 住居学科
Dept. of Housing and Architecture

建に着目したものの3種類に大別できる。(Table 2) また、この他に、事前復興の重要性について着目した研究^{1) 2) 3)}も確認できた。3種類に大別した研究のうち、特に日常生活の復興については、住民へのアンケート調査を用いた研究や、制度などのソフト面に言及した研究⁴⁾が多く確認できた。一方、日常生活の復興について、具体的な生活空間に言及している研究は確認できなかった。

以上の、災害時の居住地移転に伴う空間変容に関する既往研究と、生活空間の復興に関する既往研究から、居住地移転をおこなう際に考慮すべき、日常生活を継承するために必要な視点が明確に定義されていないことが推察される。

本研究の最終目的は、生活空間の復興に必要な視点及び、東日本大震災後の居住地移転による空間変容が日常生活に与えた影響を明らかにすることで、安全性や利便性の担保と、地域コミュニティや従前集落の日常生活の継承を両立できる、居住地移転の在り方について明らかにすることである。本稿では、災害時の生活空間の復興に必要な視点を明らかにするための第一段階として、生活空間研究に対する視座がどのように変化してきたかを明らかにすることを目的とする。

1. 2 研究方法

本研究では、今和次郎が提唱した生活学と、建築学会及び家政学会の学会論文を資料として用いる。まず、学術的に“生活”を体系化しようと試みた今和次郎が提唱した“生活学”に関する資料から、生活の定義及び捉え方を、主に学術的観点から読みとる。なお、生活学に関する文献は、今和次郎の他に、西山卯三⁵⁾や川添登^{6) 7) 8)}らのものも確認できたが、それらの本も今和次郎の著作を引用している箇所が多数あることから、今回は原典となる今和次郎の著作を研究対象とした。続いて、建築学会及び家政学会で発表された全学会論文のうち、生活について扱っている論文を抽出し、生活に対する視座がどのように変化してきたのかを読み取る。具体的には、論文タイトルに“生活”という語を含むものをフィルターで抽出し、①阪神淡路大震災まで、②阪神淡路大震災から東日本大震災まで、③東日本大震災からの3つの期間ごとに、テキストマイニングソフトKH coderを用いて、対応分析と共起ネットワーク分析をおこなう。

Table 1 Past research on spatial transformation due to a relocation of residence

① 宅地の再編に 着目した 既往研究	<ul style="list-style-type: none"> ●集団移転宅地の形状には土木的判断が多分に関係した(石丸ら, 2015)¹³⁾ ●集落単位での移転が容易であった小規模集落では地域コミュニティが維持された(石丸ら, 2015)¹³⁾
② 住宅の形状に 着目した 既往研究	<ul style="list-style-type: none"> ●住宅周辺の畑や続き間の継承が、地域コミュニティ維持の具体的な方策である(佐藤ら, 2014)¹⁴⁾ ●移転した多くの住民は、地域コミュニティの喪失や、日常生活の変化に不満を抱いており、お裾分けや互いの家の訪問といった近隣交流の減少が顕著である(近藤, 2015)¹⁵⁾

Table 2 Past research on reconstruction of living spaces

① 集団移転に 着目した 既往研究	<ul style="list-style-type: none"> ●用地取得、外部資源、立地条件、事業経費、運営管理、文化継承の6つの課題を検討する必要がある(陳ら, 2012)¹⁶⁾ ●東日本大震災の集団移転では、産業衰退、人口流出、高齢化、地域の主体性と文化歴史の継承と、津波の脅威への対策へのバランスが重要だと推察される(大津山ら, 2018)³⁾
② 住宅再建に 着目した 既往研究	<ul style="list-style-type: none"> ●大規模半壊の場合、居住地移転が起こりやすい(乾, 2015)¹⁷⁾ ●損壊が大きいほど、再建が進捗しない(阿部ら, 2016)¹⁾ ●そもそも生活支援金の受給に至らない場合がある(阿部ら, 2016)¹⁾ ●仮設住宅(集合住宅)に移転する段階で、これまで戸建て住まいだった住民にとっての、生活スタイルの変化はとて大きい(小川, 2017)¹⁸⁾
③ 生活再建に 着目した 既往研究	<ul style="list-style-type: none"> ●生活再建に必要な要素を、すまい、つながり、まち、こころとからだ、くらしむき、そなえ、行政とのかかわりの7つに分けることができる(川見ら, 2018)¹⁹⁾ ●生活再建の課題のうちで、時間が経つほど多くの票を集めるようになる意見は、「隣近所の人々がバラバラで話し合いができない」「若い人が地域を離れてしまった」「交通機関の復旧の遅れ」「買い物不便」などの、コミュニティや、日々のルーティンに関するものが多い(土屋ら, 2014)²⁰⁾ ●まちやつながりに関する関心は、地区に関わらず高い(伊藤ら, 2019)²¹⁾(松川ら, 2015)²²⁾

2 生活学における生活空間の捉え方の検討

2.1 生活学の概要

生活学は、今和次郎が1951年に「生活学への空想」という新聞記事で初めて提唱しており、建築学や社会学などの専門分野の枠を越え、生活を質の面から分析する学問である。歴史的には、1923年の関東大震災を発端として、同じく今和次郎によって提唱された考現学がもとになっている。今和次郎によると、考現学は、“現代風俗あるいは現代世相研究にたいしてとりつつある態度および方法、そしてその仕事全体を、私たちは「考現学」と称している。⁹⁾”と述べている。考現学が、人の行動や住居、衣服などを現地調査、観察調査などをもとに統計的に分析することを学問の中心にしていたのに対し、生活学では、実践的な目的に根差していることや、どのような問題意識を研究者が持っているのかを今和次郎は重視していた。生活学は問題発見学であると述べている。また、今和次郎は建築学に対して否定的な考えを持ち、生活者を主体として生活を見ることを重視していた。特に住居については、勤労、休養、余暇それぞれの目的を達成させる役割があると述べている。このように、行為と空間を一体で捉え、生活の質を考えることを、生活学では重視している。

また、生活学は、今和次郎以降、西山卯三や川添登を始めとした学者によって論じられてきたが、近年ではあまり活発な議論はおこなわれておらず、生活の定義や、生活学の体系も曖昧なままである。これは、生活学が、社会学や文化人類学、家政学、建築学などの多領域の学問と重なる部分が多いことに起因している。

2.2 生活学から読みとる“生活”に対する視座

生活の定義及び捉え方を読みとるため、生活学について記述がある資料のうち、本研究では、今和次郎の著作、「考現学 今和次郎集 第1巻」¹⁰⁾、「住居論 今和次郎集 第4巻」¹¹⁾、「生活学 今和次郎集 第5巻」¹²⁾を主に研究対象とした。本著作は、今和次郎によって複数の文献で執筆されたものを編集し直したものとなっており、初期から後期の文献まで載っているため網羅性があり、生活学の全体像を掴むことができる資料である。

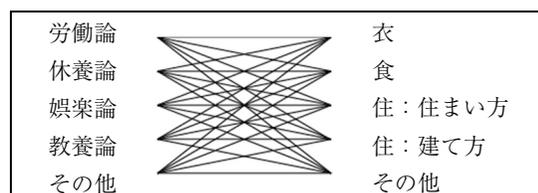
資料には、生活学等の定義から、研究対象を設定した分析に対する考察まで、幅広い内容が載っている。今回は、生活学等の定義に関する章の中から、

生活の定義及び捉え方に関する記述を整理し、研究の視点に関するものと、生活空間に対するものに分類した。

2.3 研究の視点に対する記述の整理

研究の視点に関するもの (Table 3) は、住居研究の視点と、生活行為研究の視点の2つに大別できた。住居研究の視点としては、①②住まい方と建て方に分類することができる、③建築は住まい方と住み方に影響を与える。といった記述が確認できた。また、④生活学は、労働論、休養論、娯楽論、教養論などと、衣、食、住などの論をかけあわせて考えるものであるとしている。さらに、⑤間取りを「暮らし方の設計書」と呼んでいることから、人間の生活行為から導き出された論を、住宅などのハード面と組み合わせて反映したいという今和次郎の意図が推察できる。これらの記述から、生活学を体系化すると、(Fig.1)のように整理することができる。

生活空間研究の視点としては、今和次郎は生活行為を、⑥⑫の視点に分類している。祀神佛や接客などの、家族以外の他者が関わる行為も含まれている。また、その他の生活行為は、家族の年齢ごとにさらに細かく分類すべきとしている。さらに、ここに述べられている⑫の生活行為は、国や時代が異なっても普遍であると述べている。



※今和次郎集第1,4,5巻をもとに筆者作成

Fig.1 Diagram of the system of life sciences based on the ideas of Wajiro Kon

2.4 生活空間に対する記述の整理

生活空間に対するもの (Table 4) としては、①②生活空間の分類、③~⑤生活空間の役割、⑥~⑨震災時の生活空間、⑩⑪生活空間が狭い場合に生じる問題、そして特徴的な、⑫⑬生活感情といった5つの視点に大別できた。

生活空間の分類については、①建築、家具、什器、庭園等への注意が必要だと述べていることから、生活空間は、建築の内部から外部に渡っている視点を持っていたことが読み取れる。また、②農家などの

Table 3 Description of the research perspectives of Wajiro Kon

住居研究の視点	分類	①	もともと住居といふものを注意するのには、第一に住ひ方を専ら考へる方面と、そして第二に建て方の技術を専ら究めんとする方面と二つの場合があるのです。(暮らしと住居, 1944) ²³⁾
		②	今日の住居といふものは建て方の方からと住まひ方の方からと両面からの要求が長い歴史を通してからみ合つて出来て来てゐるのであります。(暮らしと住居, 1944) ²⁴⁾
		③	建築のほうから生活に接触していく歩みとしては、“住まい方”あるいは“住み方”の研究がある。(生活学, 1971) ²⁵⁾
	体系	④	人間の生活行動の各分野を内容的に吟味した、労働論、休養論、娯楽論、教養論などを一貫したものをとして総合思索した生活言論を築きあげ、そして、衣、食、住などの姿をそれに則して新たに調整して各論として形成させていく、というような生活学の樹立を、と空想してみたくなるのである。(一九五一年一月二一日)(生活学, 1971) ²⁶⁾
間取り	⑤	だから住居と云ふもの、特にその間取と云ふものは、それに住む人々の暮らし方の設計書に相當してゐるとも云へるのであります。(暮らしと住居, 1944) ²⁷⁾	
生活行為研究の視点	分類	⑥	住居生活といふものは一祀神佛、休養、團欒、接客、仕事(老人、主人、主婦、子供(遊びと勉強))、食事、炊事、入浴、排せつ、育児、睡眠、臥床(病気のときなど)となるのでありますが、これらの事項は、國柄だとか時代のせいだからとて、一つとして捨てるわけには行かないのであります。たゞ國に依つて、或いは時代によつて、これらの項目に出てゐる各々の事のやり方がちがふ、結局これらの各事項のやり方の綜合が、全體の暮らし方の型を作り上げてゐることになるのです。(暮らしと住居, 1944) ²⁸⁾

Table 4 Description of living spaces by Wajiro Kon

生活空間の分類	①	暮らし方の一層精細な型を知るのには、住居建築そのものばかりでは不十分で、建築、家具、什器、庭園等への構へ方にも注意が拂はれなければならないになります。(暮らしと住居, 1944) ²⁹⁾
	②	しかし上に挙げた住居生活の内容分析は、生産作業から切りはなされた純粹の暮らしの場合で、一農家ならば一施設を参加させて、組み合わせられた生活舞臺を考へなければならないのであります。(暮らしと住居, 1944) ³⁰⁾
生活空間の役割	③	住生活には、休養の部面、社交的部面、事務的部面、生産的部面、慰乐的部面がある。(生活学, 1971) ³¹⁾
	④	最も低い段階の生活は、労働と休養(栄養)とだけで循環する生活であり、次は第一次的文化生活といえる慰樂を加えた循環の生活であり、さらに高度な第二次的文化生活といえるものは、教養に努める要素が加わつて循環する生活で、それぞれ理想的な生活の段階だということである。(一九四九年四月)(生活学, 1971) ³²⁾
	⑤	家庭内部における勤労と、休養とそして余暇との、それぞれ質の異なる生活が、それぞれいかなる施設を要求しているか。(生活学, 1971) ³³⁾
震災時の生活空間	⑥	ぎりぎりに貧しい人々の住居は、ひと部屋であるよりしかたがない。一要素の重点的なものは何かといえば、寝と食との場としての構えだといわなければならない。(住居論, 1971) ³⁴⁾
	⑦	今日の被災者の多数は、既成生活習慣を営んだ舞臺であつた既成様式の住居を失つたのである。(生活学, 1971) ³⁵⁾
	⑧	日常使い慣れている些細な物品の喪失は、日々の習慣的な行為の際に、ひとしおに寂しさをそそるものらしい。(生活学, 1971) ³⁶⁾
	⑨	使用される物品と人の生活との関係、一それらの関係は、きわめて緊密に結ばれていることをみた。一そしてもしも何かある場合には、生活習慣そのものの変更が要求されてくることを知つた。そしてここに住居生活というものの追求さるべきポイントがある点を暗示し得たかと思うのである。(生活学, 1971) ³⁷⁾
生活空間が狭い場合	⑩	標準ではない、しかたない広さの住居は、みすみす人々の職業的能力を削り落としつつあると予想されてくるのである。(住居論, 1971) ³⁸⁾
	⑪	絵にかいた小住宅の設計案は、誰にもちょっと好ましいものにみえよう。一しかし、もっと一般的な日常生活を希求する願ひからは遠いものだと断定しなければならないものようだ。(住居論, 1971) ³⁹⁾
	⑫	動く生活のリズムをおもむくままにとりうるのがレクリエーションの原理であるという点から、そのような限定も容易には受取りがたいのである。はたしてわれわれの住居感情の拠点は、どこに求むべきかは、ここでは問題のままのこしておこう。(一九五一年五月)(住居論, 1971) ⁴⁰⁾
住宅感情	⑬	農繁期における彼らの住宅感情は、まったく虚無に近い状態だとみないわけにはいかない。一改良するのでなければと思える現実の場面をみて、一その場に妥当する住居感情に即した提出をする一(住居論, 1971) ⁴¹⁾

場合は、①で述べた空間に加えて、生産のための場合も、生活空間を考えるうえで考慮しなければならないとしている。

生活空間の役割については、休養の部面、社交的部面、事務的部面、生産的部面、慰楽の部面といった点があるとしており、これらの質の異なる生活全てに対して、住宅が施設としての役割を果たさなければならないとしている。また、労働と休養（栄養）とだけで循環する生活が、最も低い段階の生活であるとしている。

震災時の生活空間については、⑤で述べたような、⑥寝食最低限の生活になってしまうとしている。また、住居を失うことは、⑦既存生活習慣の喪失であるとも述べている。さらに、⑧日常使い慣れている些細な物品の喪失は、住宅などの大きなハード面の喪失よりも、日常の中で寂しさを感じる原因となりやすいとしている。そして、こうした些細な物品の喪失も、⑨生活習慣の変更につながると述べている。

生活空間が狭い場合に生じる問題については、⑩職業的能力を削ぐといったことや、⑪一見好ましいが、文化的な生活を送るには向いていないと断定できるといったことが述べられている。また、狭い住宅を、茶室などの理論を用いることで理想化しようとするに対して否定的であり、和次郎は、豊かな生活を送るためには、住宅が狭いことは問題だと考えていたことが読み取れる。

さらに特徴的なのが、生活感情という記述がある点である。ここでいう住宅感情は、住民の住宅に対する関心のことを指していると考えられるが、⑬特に農民などの、生産活動に忙しい住民は、住宅を気にかける余裕がないとしている。

3. 生活空間研究における視座の変遷

3.1 分析の方法

続いて、建築学会及び家政学会で発表された全3874件の学会論文のうち、論文タイトルに“生活”という語を含むものをフィルターで抽出し、①阪神淡路大震災まで（1190件）、②阪神淡路大震災から東日本大震災まで（1766件）、③東日本大震災から（918件）の3つの期間ごとに、テキストマイニングソフト KH coder を用いて、頻出度順の抽出語リストを作成した。リストの上位100位以内に入っている語のうち、生活空間研究の視座を読み取る上で関連が少ないと思われる、“研究、調査、実態、評

価、考察、事例、変化、分析、影響、問題、課題、特性、場合、比較、変容、状況、検討、対象、要因”といった19の語を除く処理をおこなったデータを用いて、対応分析と共起ネットワーク分析をおこなった。対応分析は、期間同士を比較するために用い、共起ネットワーク分析は、期間ごとの特徴を分析するために用いた。

3.2 対応分析

対応分析の結果を、(Fig.2)に示す。File1が①阪神淡路大震災までのデータ（以下1期）、file2が②阪神淡路大震災から東日本大震災までのデータ（以下2期）、file3が③東日本大震災からのデータ（以下3期）である。対応分析は、原点(X.Y) = (0.0)から離れるほど、各fileに特徴的な語であることを示し、原点に近いほど、どのfileにも含まれる語であることを示す。また、バブルごとの距離は、関連の強い語は近くに、関連の弱い語は遠くにプロットされている。さらに、バブルの大きさは、出現回数の多さを示している。

1期は、“意匠”“歴史”“農村”“構造”“都市”などが特に特徴的な語である。また、“計画”という語は特徴的かつ、出現回数も多い。このことから、ハード面をいかに計画し、整備していくかが、生活空間研究においても重要視されていたといえる。

2期は、“高齢”“子ども”などといった具体的な生活者を示す語が特徴的な語として出現している。

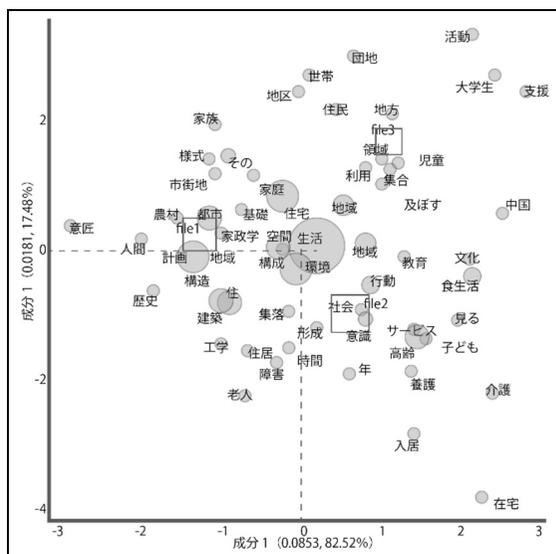


Fig.2 Results of correspondence analysis

また、“社会”“行動”“文化”“意識”などの、ソフト面について想起させる語が特徴的な語として出現している。ハード面だけではなく、ソフト面も重視されてきたことが推察される。

3期は、全体的な特徴として、1期及び2期と分布図上での位置が少し遠くなっており、また、3期のみの特徴的な語が多いことが読み取れる。特に“活動”“支援”といった、住民以外を想起させる言葉が最も特徴的な語として出現しており、生活空間に、住民以外の外部の人間の手が必要だったこと

が推察される。

3. 3 共起ネットワーク分析

さらに、期間ごとの特徴をより詳細に分析するため、期ごとに共起ネットワーク分析をおこなった。まず、1~3期を統合したデータを共起ネットワーク分析することで、阪神淡路大震災から現在までの全期間の特徴を読み取った。(Fig.3) 続いて期ごとに共起ネットワーク分析をおこない、1期の結果を、(Fig.4)に、2期の結果を、(Fig.5)に、3期の結果を、(Fig.6)に示す。共起ネットワーク分析は、

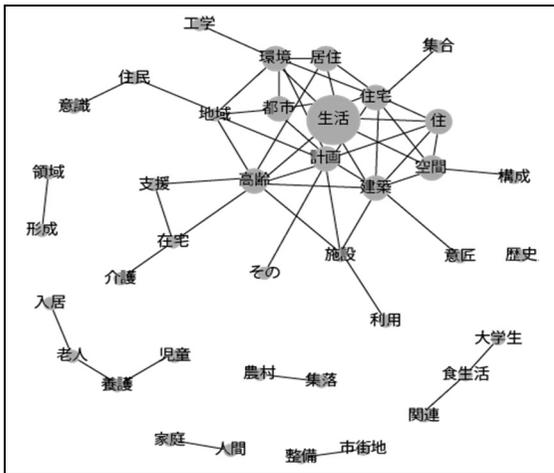


Fig.3 Results of co-occurrence network analysis (total period)

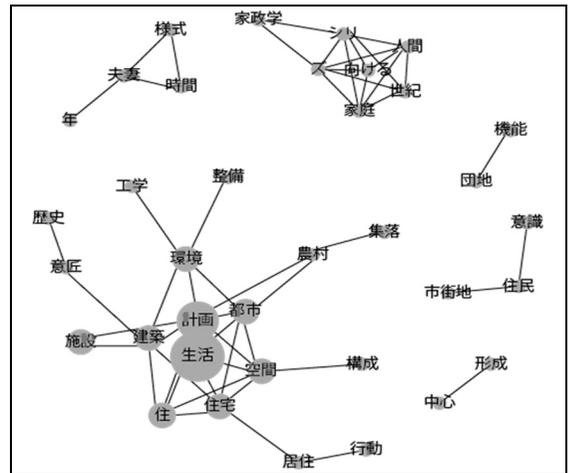


Fig.4 Results of co-occurrence network analysis (File1: ① Prior to the Great Hanshin-Awaji Earthquake)

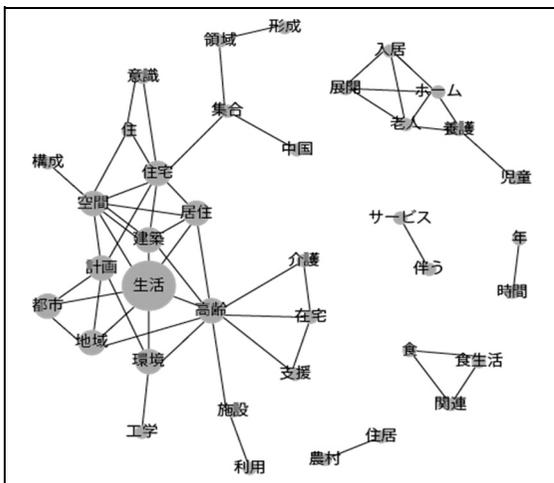


Fig.5 Results of co-occurrence network analysis (file2: ② From the Great Hanshin-Awaji Earthquake to the Great East Japan Earthquake)

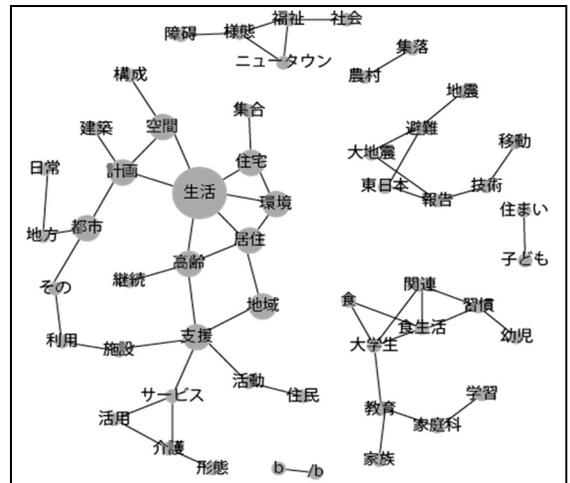


Fig.6 Results of co-occurrence network analysis (file3: ③ After the Great East Japan Earthquake)

バブルが大きいほど語の出現回数が多い。また、語と語が線で結ばれていると、共起性・関連性があり、その線が太いほど関連が強い。円の位置、近さに意味はない。

(Fig.4-6)を、それぞれ(Fig.3)と比較する。1期は、生活は計画や意匠などの視点から論じられるものであった。また、生活を共にする対象者は家族と捉えている研究が多く確認出来た。2期は、高齢化を背景として、在宅介護や老人ホームなどの論文が増加する。さらに、こうした社会課題を、地域で解決していくための在り方が検討され始める。また、集合住宅についての議論も増加する。3期は、活動や支援などのソフト面の行動を想起させるようなテーマが生活を考えるうえで重視されている。このように、生活の捉え方は、生活を共にする対象者が家族から地域コミュニティに拡大し、生活を捉えるための視点も計画や意匠といったハード面だけではなく、ソフト面も含めた多様な視点から論じられるようになってきたことが読み取れる。(Table 5)

Table 5 Changes in perspectives regarding research on living spaces

1期	<ul style="list-style-type: none"> ●生活は計画や意匠などの視点から論じられるものであった。 ●生活を共にする対象者は家族と捉えている研究が多く確認出来た。
2期	<ul style="list-style-type: none"> ●高齢化を背景として、在宅介護や老人ホームなどの論文が増加。 ●社会課題を、地域で解決していくための在り方が検討され始める。 ●集合住宅についての議論も増加。
3期	<ul style="list-style-type: none"> ●活動や支援などのソフト面の行動を想起させるようなテーマが生活を考えるうえで重視されている。

4. まとめ

学術的に“生活”を体系化しようと試みた今和次郎が提唱した“生活学”に関する資料から、生活の定義及び捉え方を、主に学術的観点から読みとったところ以下のことが確認できた。

①研究の視点に関するものは、住居研究の視点と、生活行為研究の視点の2つに大別できる。②生活学は、労働論、休養論、娯楽論、教養論などと、衣、食、住などの論をかけあわせて考えるものであるとしている。③間取りを「暮らし方の設計書」と呼ん

でおり、人間の生活行為から導き出された論を、住宅などのハード面と組み合わせて反映したいという今和次郎の意図が推察できる。④生活行為を、祀神佛や接客などの、家族以外の他者が関わる行為も含めた12の視点に分類している。⑤生活空間は、建築の内部だけではなく、外部も含むと考えていた。⑥住宅は、質の異なる生活全て対して、役割を果たさなければならないとしている。⑦住居を失うことは、既成生活習慣の喪失である。⑧住宅が狭いことは問題だと考えていた。⑨特に農民などの、生産活動に忙しい住民は、住宅を気にかける余裕、すなわち住宅感情があまりないとしている。

また、建築学会及び家政学会で発表された全学会論文のうち、生活について扱っている論文を抽出し、生活に対する視座がどのように変化してきたのかを読み取ったところ以下のことが確認できた。①阪神淡路大震災以前では、生活は計画や意匠などの視点から論じられるものであった。また、生活を共にする対象者は家族と捉えている研究が多く確認出来た。②阪神淡路大震災から東日本大震災の期間では、高齢化を背景として、在宅介護や老人ホームなどの論文が増加する。さらに、こうした社会課題を、地域で解決していくための在り方が検討され始める。また、集合住宅についての議論も増加する。③東日本大震災以後では、活動や支援などのソフト面の行動を想起させるようなテーマが生活を考えるうえで重視されている。このように、生活の捉え方は、生活を共にする対象者が家族から地域コミュニティに拡大し、生活を捉えるための視点も計画や意匠といったハード面だけではなく、ソフト面も含めた多様な視点から論じられるようになってきたことが読み取れる。

これらのことから、今和次郎は初めから生活を多角的に捉えていた一方で、生活空間研究は時代を追うごとに生活を多角的に捉えようとするようになったことがわかる。生活を捉えることは、非常に多くの視点が必要であり、いまだに生活学の方法や、生活の評価軸が確立されておらず、震災復興計画に、生活復興の視点を入れることが困難であるのも、頷ける。

参考文献

- 1) 阿部俊彦, 山崎優介, 牧野創太, 鷺田将也, 佐藤滋: 復興模擬訓練を契機とした持続的事

- 前復興まちづくり手法の開発, 日本建築学会技術報告集, 22 巻 50 号, pp.325-330, 2016
- 2) 市古太郎, 吉川仁, 中林一樹: 2000 年代に展開した「震災復興まちづくり訓練」の実施特性と訓練効果の考察 ポスト東日本大震災期の事前復興対策を考えるための基礎的検証, 都市計画論文集, 47 巻 3 号, pp.877-882, 2012
 - 3) 大津山堅介, 牧紀男: 防災政策体系における事前復興計画の位置づけに関する日米比較と課題抽出, 都市計画論文集, 53 巻 2 号, pp.132-143, 2018
 - 4) 小川美由紀: 東日本大震災における発災から災害公営住宅入居に至る被災者の居住形態の変化と課題—福島県いわき市・豊間団地の入居者を対象として—, 日本建築学会技術報告集, 23 巻 54 号, pp.731-734, 2017
 - 5) 西山卯三: すまい考今学 現代日本住宅史, 彰国社, 1989
 - 6) 川添登: 今和次郎 その考現学 シリーズ民間日本学者 9, リプロポート, 1987
 - 7) 川添登, 一番ヶ瀬康子: 生活学原論 講座生活学第 1 巻, 光生館, 1993.
 - 8) 川添登, 佐藤健二: 生活学の方法 講座生活学 第 2 巻, 光生館, 1997
 - 9) 今和次郎: 考現学 今和次郎集 第 1 巻, ドメス出版, pp13-11, 1971
 - 10) 今和次郎: 考現学 今和次郎集 第 1 巻, ドメス出版, 1971
 - 11) 今和次郎: 住居論 今和次郎集 第 4 巻, ドメス出版, 1971
 - 12) 今和次郎: 生活学 今和次郎集 第 5 巻, ドメス出版, 1971
 - 13) 石丸時大, 森傑, 野村理恵: 復興整備計画からみる防災集団移転促進事業の空間的特徴, 日本建築学会計画系論文集, No.715, pp.1979-1989, 2015.9
 - 14) 佐藤布武, 貝島桃代, 橋本剛: 漁村集落における土地利用の変化と津波への対策が集落構成へ与えた影響, 日本建築学会計画系論文集, No.699, pp.1119-1127, 2014.5
 - 15) 近藤民代: 東日本大震災におけるがけ地近接等危険住宅移転事業の活用実態と期待される役割に関する基礎的研究, 日本建築学会計画系論文集, No.715, pp.2043-2049, 2015.9
 - 16) 陳海立, 劉怡君, 牧紀男, 林春男, 澤田雅浩: 災害復興における集団移転と生活再建の課題 台湾モーラコット台風の「永久屋基地」の基礎分析を踏まえて, 都市計画論文集, 47 巻 3 号, pp.919-924, 2012
 - 17) 乾康代: 被災者の住宅再建の進捗状況と再建支援課題, 日本建築学会計画系論文集, 80 巻 714 号, pp.1903-1912, 2015
 - 18) 小川美由紀: 東日本大震災における発災から災害公営住宅入居に至る被災者の居住形態の変化と課題—福島県いわき市・豊間団地の入居者を対象として—, 23 巻 54 号, pp.731-734, 2017
 - 19) 川見文紀, 林春男, 木村玲欧, 田村圭子, 井ノ口宗成, 立木茂雄: 生活再建 7 要素が東日本大震災被災者の生活復興感に与える影響—震災から 5 年が経過する中での東日本大震災生活復興調査から—, 地域安全学会論文集, 33 巻, pp.53-62, 2018
 - 20) 土屋依子, 中林一樹, 小田切利栄: 被災者の復興感からみた東日本大震災の生活復興過程—大船渡・気仙沼・新地の 3 ヶ年の被災者調査から—, 地域安全学会論文集, 24 巻, pp.253-261, 2014
 - 21) 伊藤圭祐, 牧紀男, 立木茂雄, 佐藤翔輔, 松川杏寧: 復興事業区域内に自力再建する被災者の住宅再建に関する意思決定の規定因—宮城県名取市を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, 84 巻 762 号, pp.1863-1870, 2019
 - 22) 松川杏寧, 辻岡綾, 立木茂雄: すまい方別に見る被災者の生活再建過程の現状とその課題—宮城県名取市での被災者ワークショップのデータをもとに—, 地域安全学会論文集, 25 巻, pp.23-33, 2015
 - 23) 今和次郎: 暮らしと住居, 三国書房, pp3, 16, 1944
 - 24) 今和次郎: 暮らしと住居, 三国書房, pp5, 15, 1944
 - 25) 今和次郎: 生活学 今和次郎集 第 5 巻, ドメス出版, pp84, 112, 1971
 - 26) 今和次郎: 生活学 今和次郎集 第 5 巻, ドメス出版, p17, 116, 1971
 - 27) 今和次郎: 暮らしと住居, 三国書房, p7, 14, 1944

- 28) 今和次郎：暮らしと住居，三国書房，p8, 11, 1944
- 29) 今和次郎：暮らしと住居，三国書房，p9, 18, 1944
- 30) 今和次郎：暮らしと住居，三国書房，p10, 11, 1944
- 31) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，目次，1971
- 32) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，p27, 15, 1971
- 33) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，p84, 16, 1971
- 34) 今和次郎：住居論 今和次郎集 第4巻，ドメス出版，p186, 16, 1971
- 35) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，p83, 11, 1971
- 36) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，p130, 11, 1971
- 37) 今和次郎：生活学 今和次郎集 第5巻，ドメス出版，p132, 114, 1971
- 38) 今和次郎：住居論 今和次郎集 第4巻，ドメス出版，p189, 116, 1971
- 39) 今和次郎：住居論 今和次郎集 第4巻，ドメス出版，p190, 16, 1971
- 40) 今和次郎：住居論 今和次郎集 第4巻，ドメス出版，p189, 19, 1971
- 41) 今和次郎：住居論 今和次郎集 第4巻，ドメス出版，p187, 112, 197

和文抄録

本稿では、災害時の生活空間の復興に必要な視点を明らかにするための第一段階として、生活空間研究に対する視座がどのように変化してきたかを明らかにすることを目的とする。本研究では、今和次郎が提唱した生活学と、建築学会及び家政学会の学会論文を資料として用いる。生活の捉え方は、時代を追うごとに、生活を共にする対象者が家族から地域コミュニティに拡大し、また、計画や意匠といったハード面だけではなく、ソフト面も含めた多様な視点から論じられるようになってきている。今和次郎は初めから生活を多角的に捉えていた一方で、生活空間研究は時代を追うにつれて、生活を多角的に捉えようとするようになったことがわかる。生活を捉えることは、非常に多くの視点が必要であり、いまだに生活学の方法や、生活の評価軸が確立されていないのも頷ける。